

花の中を歩いた大佐渡トレッキング

5月8日22時55分京都駅前発の新潟行き夜行バスに、13人の山仲間が乗り込んだ。行く先は佐渡島、花の島・佐渡の大佐渡山脈トレッキングが目的。

翌9日、新潟港から高速船・ジェットfoilに揺られて佐渡両津港へ、そしてタクシーでアオネバ登山口へ。そこで早くも花たちの出迎

えを受ける。バス道路の両側に白のオドリコソウ、イチリンソウ、ヒトリシズカ、アケビ等々が開花しており、今から始まる山登りへの期待を膨らませてくれる。



↑シラネアオイ

世界に誇りたいシラネアオイの群生

アオネバ溪谷に入るとすぐにオオイワカガミの大群落、ピンクの花が両側の崖一面を覆っている。その光景に感嘆する間もなく、シラネアオイの大きく優しい花が、いっぱい、いっぱい現れる。この紅青紫色の大きな（直径

7cmほど）花を初めて見る人が、その美しさに驚き、感激。

他の山で見たことがある人たちも花の数の多さにびっくり、ため息まじりに「すごい」「きれい」「素晴らしい」などの言葉を連発し、花に見とれながら、ゆっくりと登っていく。

白根葵＝「日光白根山で名付けられたタチアオイに似た花」の意だが、いつ、どこで見ても美しい。中部日本から北海道まで、主として日本海側の深山に自生しているが、1属1種の日本特産種。これだけ沢山の花を見ていると「日本の自然のすばらしさ」を世界に誇りたくなる。

エゾエンゴサク

シラネアオイは奈良県の金剛山・千早園地にも植えられており、今の季節観ることが出来るが、この佐渡の自然の中で、新緑とのコントラスト

も鮮やかに、おびただしい花の開花を見られるのは山を登ってきた者のみが受けられる幸せなのだをつくづく思う。

私は、アオネバ溪谷の道を歩くのは今度で3回目だが、改めてここのすごさを感じ入ってしまう。そしてい



↑オオイワカガミ



つまでも、この自然を大切に後世に引き継いでほしいと、切に願う。

シラネアオイのほか、カタクリ、ニリンソウ、キクザキイチゲ、エンレイソウ、サンカヨウ、チゴユリ、エゾエンゴサク等などが路傍を飾っている。

発熱して虫を呼ぶザゼンソウ

雪も各所に残っており、雪が解けたばかりの所にはショウジョウバカマやオオミスミソウ(雪割草)など早春の花が姿を見せている。そして、雪解け水の中でザゼンソウが咲いていた。光沢のある赤褐色の覆い(仏炎苞と呼ばれる)の中で咲く姿を、座禅を行う達磨大師に見立てての命名という。寒い時期から花を開くこの植物は、受粉を援ける虫たちを呼ぶために、仏炎苞の中を温室にし、その温度は時に摂氏20度にもなると言う。この花の不思議でもある。



↑ザゼンソウ



↑カタクリ

も花の中を歩く。主役はカタクリ、登山道の両側に「これでもか、これでもか」と言わんばかりにカタクリが咲いている。中には残雪を突き破って新芽を出しており、雪の下で春を準備してきた小さい植物たちのけなげな努力に「頑張ってるね」と声をかけたくなる。

強烈な風が吹き付ける尾根の草地では、アマナやニシキゴロモが地を這うようにして可愛い花を咲かせており、木々も風向きに従うように幹を傾けている。アラゲヒョウタンボク、ミネザクラが花をゆすられながら、風に耐えている。過酷な条件の中でも、生をつなごうとする姿に励まされながら、遠くに見える最高峰(標高1172m)めざして歩き続ける。

分厚い雪に埋もれた登山道を探しながら、アップダウンを繰り返して、山頂直下の雪の大斜面をロープにすがって登り、正午過ぎに金

↓サンカヨウ北山頂上着。ほぼ予定通りだ。女性たちの頑張りには

頭が下がる。さらに2時間の車道歩きをして、7時間に及ぶ大佐渡トレッキングは無事終わった。往復夜行バス使用の強行スケジュールだったが、春の花を存分に堪能した山旅だった。



花に酔うように歩いて、まもなくアオネバ十字路に到着、ここは大佐渡山脈縦走路との合流点、芝生のある広場となっており、ここで弁当を開いて昼食。

昼食後、ドンデン山荘へと歩く。カタクリなどが路傍の斜面に咲き、タムシバ、オオカメノキなども白い花を見せていた。

花、風、雪の大佐渡縦走路

10日朝7時に出発、大佐渡山脈の縦走路を金北山めざして歩き出す。この日

金北山頂上直下の斜面を登る↓

